

## 風土と文学-石川の場合-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/7155">http://hdl.handle.net/2297/7155</a>

# 風土と文学

## ——石川の場合——

〈風土と文学——石川の場合〉というタイトルの意味は、石川県の風土と文学の関係はどのようになっていくのか、つまり、石川県の風土が文学にどのようなかかわっているのか、いないのかということを考えてみるものである。その際、石川県というのはもちろん能登と加賀の両方を含むわけで、さらに能登は内浦と外浦とではかなり差異が見られるし、それらにも注意する必要がある。文学といっても時代差やジャンルの別もあるわけで、それも考慮せざるをえない。となると、考察の対象・内容は極めて範囲が広く、また多岐多様にわたるため厄介な問題となり、慎重な対応が求められる。

そこで、取り敢えずは風土を〈住民の慣習や文化に影響を及ぼす、その土地の気候・地形・地質など〉(『大辞林』)と定義しておこう。換言すれば、石川県の地形や地質、気候がいかにそこに住む人達の慣習や文化に影響しているのかということに

森 英一

なる。当然ながら、その気候などによって形成された慣習や文化は次の世代に歴史として継承されていき、さらに、その時々々の社会状況を反映し、変容を加えながら子孫代々伝播される。地質や地形等は長い地球の歴史から見れば、高々百年位では、大地震等の天変地異が発生しない限りはそんなに変化をみせないとしても、社会状況の変化による変貌はかなりのものであるということとは私達の知るところである。

まず、石川の地形や気候の特色をみると、長い海岸線を所有している一方、高山を抱き、農作物に適したそこそこの土地を備え、夏は高温多湿、冬は降雪に見舞われる。一言で言えば、自然の幸にも恵まれる豊かな自然環境に置かれているといえよう。

では、そんな自然環境に住む者達が築いてきた文化はどのようなものだったのだろうか。古代から大陸との交流が盛んであ

つた能登だが、加賀地方共々、源平の合戦を経て、蓮如の布教後は浄土真宗の教えが根づくようになり、一向一揆後に「百姓ノ持チタルクニ」が約一世紀続く。しかし、なんといつても前田利家が金沢入城以降に、石川は本格的に発展したといえよう。今日に残る伝統工芸の基礎を築き、芸能や学問を奨励して加賀百万石文化の花が開いたのである。

果してこのような風土や文化伝統が後世にどのような影響していくのだろうか。最初にこれまでどんな見方がなされてきたかを紹介したい。

その前に、もう一度、風土と文学に関する考察について基本的な事柄を確認しておきたい。私達は長谷章久著『日本文学と風土』（昭和四十四年四月刊 講談社現代新書）という考察を持っている。当時、日本文学風土学会の常任理事であった長谷の簡明ながら、基本的事項を網羅した意欲作である。この中には、風土が文学に与える影響について縷々考察を加えている。

和辻哲郎の『風土』や古代の『風土記』、鎌倉期の成立と言われる『人国記』の検討から始まって、東京や京都の気温や晴天日の紹介・考察、現代女子学生の出身別による気質調査結果、ブルーノ・タウトの著作の考察、等々かなり多方面に多角的な考察を展開しているが、どうしても古典文学が対象になりがちである。マスコミや交通が発達した今日でも風土の差はあると

主張する一方、近代文学と風土的関心の減少乃至欠如が問題視されるが、近代文学を対象とすることに注意深い姿勢を見せつつも、小説家より歌人の方が各自の成長期に及ぼす風土の影響は大きいとして、斎藤茂吉らに注目し、さらに、また作家でも、太宰治と葛西善蔵、石坂洋次郎では同じ津軽の作家だから、共通性があると言ひ、また、松本清張『ゼロの焦点』のような風土に関心を持った例を指摘する。これら近代文学の例における指摘の妥当性は後に検討する。

このような考察は非常に興味深く、種々教えられる点が多いのだが、慣習や文化に影響するのは風土だけでなく、その時代特有の状況と価値観も考察範囲に入れる必要があり、さらに、そこに住む者が人生の何時頃にどれだけの期間、居住していたかも重要であり、さらに、時代によってその地域を取り巻く情報量も風土に負けずに影響が大きいと考えられる。つまり、近代になると、交通やマスコミの発達によって各地域を取り巻く諸状況が均一化され、地域間の格差が次第に縮小していく。地形や気象の差に加えて、交通等の未発達による閉塞状況が地域に居住する人間達にそれまで大きな影響を及ぼしていたのが、次第に喪失していくことである。

時代が進むに連れて以上の諸因が複雑に絡み合っ問題解決は容易でない。逆に、人の移動が少なかった時代における風土

の影響は割りと考察しやすいだらう。石川においては、江戸時代以前は例えば、大伴家持の和歌が県内を詠んでいるが、先に見たように彼の居住時期や年齢等を勘案すると、来訪者の眼から見た作品と判断した方がよい。江戸時代の芭蕉と『奥の細道』の場合も同様である。いずれも風土の影響が希薄だと判断したい。その他、紀行文や実録物、漢詩文等のジャンルに作品が残されているが、工芸や芸能ほど、豊穡な遺産がないようである。とすれば、やはり、明治以降の作物をまずは対象にするべきだということになる。

以下、いくつかの先行研究を紹介するが、まず、藤本徳明著『北陸の風土と文学』（昭和五十一年八月 笠間書院刊）はサブタイトルに「金沢の文学を中心として」とあるように、能登をも対象にしたものではないが、意欲作である。長谷章久の著書も視野に入れ、風土と文学のかかわりをより特定の地域に限定した各論とも言うべきものである。極めて博識ぶりが発揮された記述で、内容の要約には困難を感じるが、次の箇所に要点があると思われる。

「放浪する聖者」としての男性と、「汚れた聖女」としての女性との、葛藤を通じての存在の根源に肉迫す荘嚴な祭儀としての愛、というのを、金沢にゆかりをもつ文

学の、根幹をなす主題の一つである、とすることは、少しく飛躍に過ぎるであろうか。

つまり、いわゆる鏡花、秋声、犀星の金沢三文豪をはじめとして金沢に描かれる作品の男性はへほとんど、秩序から疎外されつつ、「聖なるものへの渴望」「存在への郷愁」にかられて遍歴をつづける、探究の神話の、「若きアダム」としての風貌をそなえている。し、登場する女性は、へ身は汚れていても心は聖女のように美しく、時には愛する者のためには、敵と取り組む雄々しさも発揮する。そして、それらを生んだのが金沢の風土と文化だという。気候がもたらす受容的、退嬰的、保守的な風土が文化の表現形式となり、加賀藩の、幕府からの挑発を防ぐ生き方が美術工芸や芸道を盛んにし、浄土真宗が在地の白山信仰等と結合し、変形して先の「放浪する聖者」と「汚れた聖女」のパターンを次第に外在化していく、というのである。

この考察は発想が面白く、評論としては魅力的だが、いくつかの疑問点を感じる。例えば、風土の影響は長谷の指摘にあったように、一介の旅行者とそこで育った者とは全く深淺が異なる。それを考慮しているのかということ。次に、近代文学中でも小説に対しては、風土との関係が容易に証明し難いとされるが、藤本が例示しているのはほとんど小説であること。また、

作品の読み方に異論が出る余地を残すこと。例えば、五木寛之の「聖者が街にやってきた」を手がかりに論を展開する。確かにタイトルは論者にとって魅力的かもしれないが、五木の意図は自身が感じていた金沢の伝統が少しずつ揺らいできたということを描こうとしたのであって、発想が金沢という街の性格と結びついているとは思われない（詳細は、小著『五木寛之の文学・ひとつの読み方』で述べてある）。

確かに、刺激的な評論ではあるが、『文学風土学』としては個々の作品に対するもう少し緻密な考察と手続きを要するだろうというのが正直な感想・評価である。

次に『THE石川・なるほど百科 風土編』（平成二年三月 能登印刷・出版部刊）について述べる。

これは、石川の風土はへきわめて内省的な、物事についてもよくよく考えてから判断する、そういう人が大勢この地からは出た」と言い、その典型として鈴木大拙と西田幾多郎を挙げ、特に西田に真宗と加賀藩の学問奨励の影響を指摘する。同様に、この影響下に高峰謙吉や木村栄、中谷宇吉郎、四高の誕生があったと述べ、多数の文学者が輩出した背景にへき沢の風土、とくに加賀百万石の驚くべき遺産があるとする。

また、白山の存在から深田久弥、一向一揆の末裔に加賀耿二や島田清次郎を挙げ、能登の風土と宗教の影響下に坪野哲久と

加能作次郎があるという。

この本は奥付のページに執筆者一覧が掲載されているものの、項目別の署名はない。従って、執筆者は特定できない。

『石川近代文学全集別巻 軌跡・石川の文学』（平成十年十二月 石川近代文学館刊）所収の小林輝治「石川文学地図」は『能登から加賀へ各論を展開する形でさらに、その地域地域の風土性と近代文学とがどう関わってきたか』を述べている。

小林は考察の前提として自然的風土に加えて精神的風土も考えない限り、この問題は正確でないといい、その観点から（室町以降、次第にその力を大きくしていった浄土真宗の存在抜きに、加賀・能登の精神性を語ることは、一切できないだろう）と言う。その上で、能登と加賀に分けて考察を進める。

まず、能登について厳しい自然が住民を忍耐と我慢とを強いる者にし、そういう人々の心を掴んだのが浄土真宗である。加能作次郎の作品は信仰の深さを示す人々を描いていると言い、能登でも外浦はより厳しい自然のため、それを描いた作家に松本清張「ゼロの焦点」や沢木欣一の句集「塩田」、水上勉のエッセイ、安永稔和の詩集「能登」、森崎和江や高橋玄一郎の小説があると指摘する。一方、その自然の厳しさをかえって自分のエネルギー源とした歌人に坪野哲久や岡部文夫がいる。また、内浦の関係では杉森久英『能登』は忍耐や我慢を裏返した、ま

ことにしたたかな精神の強さを描くと言う。

次に、加賀については白山の偉大さを描いた深田久弥『日本百名山』を挙げ、手取川の河口で常に荒々しい海に向かって前進する開拓者精神と一向一揆の隠された熱い土壌との延長上に島田清次郎が生まれ、一向一揆の反骨の系譜に加賀歌二の作品があると指摘する。

また、金沢は多年にわたる加賀藩の文化的蓄積があったからこそ、文学にあつても明治以降も多くの作家達を輩出したと言ひ、以下、浅野川と犀川近辺に生まれ育つた作家、あるいは居住した作家を挙げる。また、四高の、近代文学に与えた影響の大きさを思い知らされるとして、関係の作家を紹介する。

凡そ以上のような内容だが、後半に従つて作家と作品名とを列挙するだけの記述になり、具体的な指摘がされていない。また、前半にしても、例えば「何か分かるような気がする」とか「ここから通じるようなものがあると考えざるをえない」とか、諸作家を列挙したあとこの地の風土性を重ね改めて考えれば、具体的な論証に若干欠けているのである。本論を所収する該當書の内容的制約や頁数の制限等があつておそらく十分な論を展開できなかつたと思われるが、それにしても、この種の文章には緻密な論証を必要とすることは言うをまたない。

前述の長谷が奈良と京都の風土と文学との違いを説明するのに月別の快晴や曇天、降水のデータを示したり、学生の出身別のアンケートによる気質の差異を提示したりするのはその実証的態度を示す手法としてある意味では当然なのである。

具体的には、白山信仰にせよ、加賀藩文化の伝統にしる、能登の厳しい氣候にせよ、それがどのように作品形成に関わっているかを証明しなければ、単なる評論でしかない。

その後、小林は「特集 金沢三文豪を生んだ風土 二つの川と百万石文化」(『北国文化』第五号平成十二年八月)において、金沢に限定して「より伝統的な文化にこだわってゆく浅野川(女川)文化と、つねに変化に敏であり、それを積極的に取りこんで新しい文化を創立してゆきたいとする犀川(男川)文化の二つが除々に形成された」という視点から犀星を考察する。また、加賀藩の徳川家に対する反権力の意識と秋声とを結びつける。

これらの指摘も発想は興味深いものだが、前文同様に説得性に若干欠けると思われる。

近代文学における風土の影響は今まで述べてきたところと重複するが、他の要因が多すぎてその占める割合はさほど多くはないのではないか。もちろん、その地域で伝承された慣習や文化も広義の風土の影響と考えれば、それはもちろん、無視でき

ないが、それらよりも①その時代の状況や価値観、②その作家の、特に人格形成期までに与えられた他人の影響、③その作家の出合った書物、④その作家が持つ才能等々が重要で、それらが多様に複雑に絡み合っただけの文学が成立している。

以下、具体的に述べていく。加能作次郎は二十歳に上京するまでに十三歳から五年ほど京都で生活したが、他は能登の外浦で生活している。父の漁業を手伝うこともあった。初期の代表作「厄年」（明治四十四年）は長期休暇を迎えた学生の〈私〉が帰省したときの話である。〈私〉には余り仲がよくない、結核に罹って瀕死の妹がいる。ために家に寄り付くのを避けているうち、死に目にも会えない。死後、余り冷淡すぎたと後悔の念にとらわれるが、自分が厄年を迎えていたことを想起し、妹が厄を背負ってくれたと感じ入る話。

これは、鯉やこづくらという魚は東南風（くんだり）が吹く時がよく釣れるとかの、古老によつて伝えられて来た生活の知恵ともいべきものが紹介され、見舞いの老婆や妹自身による真宗信仰の篤さが記されたり、厄年や火葬場の煤を飲むと病に効くという俗信が述べられたり、〈私〉の鯉漁の手伝いが描かれたり、というふうな当時の能登の風土と文化が色濃く反映された作品である。他にも、作次郎のものは能登の風土と文化が濃厚な作品が多い。これらの中には例えば宮本常一『家郷の訓』

（昭和五十九年七月刊 岩波文庫）に紹介される日本海側の他地域にも共通のものもあるが、この地独特のものも多い。まさに、風土色の濃い作家といつてもよいのである。

では、同じ外浦出身の坪野哲久はどうか。歌人だけに〈蟹の肉せせり啖へばあこがるる生まれし能登の冬潮の底〉〈殺生をいましめたまいし母のためつねあるごとし手首の数珠〉のような風土色豊かな作品が多い。しかし、それは哲久の歌人としての半面の真実を語るに過ぎず、全てではない。彼の真髓の半面はプロレタリア文学から出発したことから知られるように、反骨と抵抗の姿勢にあつた。いや、さらに詳しく言えば、最初アラギの歌人・島木赤彦に師事し、風土色が濃い作品を作っていた。さらに、そこからプロ文学に転進するのである。その間にどんな事情があつたのか。それは、風土の影響から誕生したのではなく、やはり、時代の状況から生み出されたと考えるのが妥当である。

詳細は小稿「坪野哲久論―その初期の様相」（『イミタチオ』第四十号）で述べたので、簡略に従うが、まず坪野の『昭和秀歌』が参考になる。昭和三年九月の新興歌人連盟に参集した歌人達は大正歌壇の行きつまりを打破しようと願っていたので、まもなく、彼らがマルクス主義に立脚する文学運動に発展させていく。さらに、坪野に限定して言えば、島木の『鍛錬道』の

主張をその運動に結びつけたことがあった。

もちろん、かと言って哲久短歌において風土の影響を全く否定するものではない。坪野の場合、風土と抵抗の姿勢とが微妙に入り混じっているところにその独自性があると見なければならぬ。いずれかを否定するような評価は正しいものとはいえないのである。

では、同じ抵抗の作家、加賀耿二（須井一）はどうか。小林は一向一揆の系譜に置く。たしかに彼は加賀で陶工だったが、二十二歳で京都に出てからは陶磁器従業員組合の結成に参加して、活動家になった。作家として出発したのではなかった。活動家としての精神基盤が最初にあり、それを作家に移植したに過ぎない。では、彼が活動に興味と関心を抱くようになった遠因はどこにあるのか。『つりのできぬ釣師』（昭和四十七年四月新日本出版社刊）で語るように学校の教師が貸してくれた『一握の砂』だった。たとえば、彼の「綿」「少年」「工場へ」等多くの作品の素材が郷里の加賀での経験に基づくとしても、その魂は一冊の本との出会いによって形成されたのである。それを一向一揆の血に求めるのはやはり、無理というべきである。

以上、加能作次郎、坪野哲久、加賀耿二（須井一）を例に挙げて具体的に述べたが、余りに結論を急ぎすぎたかもしれない。より慎重に風土との影響関係を論ずるには、さらにそれぞれに

ついて多数の作品を例に論証しなければならない。また、前述のように風土以外の様々の要因をも視野にいれて考察しなければならない。その結果でなければ結論を出せないはずである。その意味では、この問題はまさしく鶴のようならえどころのないものである。かなりの時間と慎重な手続きを要する。本稿はまだ問題提起の序論に過ぎない。

（本学教員）